コロナ感染で留年処分となった東大２年生ついに提訴…不誠実すぎる大学の対応とは

9/1　上昌弘医療ガバナンス研究所 理事長　日刊ゲンダイ

東京大学の教養学部の対応は不誠実だ（C）日刊ゲンダイ

8 月 19 日、東京大学教養学部理科 3 類 2 年生の杉浦蒼大君が、東大が下した留年処分が不当であるとして東京地裁に提訴した。杉浦君は、私が主宰する医療ガバナンス研究所で学ぶ学生だ。私は詳細を知る立場にある。背景をご紹介したい。

彼が教養学部と争うことになったのは、コロナ感染への救済措置を教養学部が取らなかったためだ。杉浦君は 5 月 17 日、39 度の発熱・倦怠感が生じ、コロナ感染と診断された。その日は必修の生物の授業があり、出席すると共に、前週 10 日受けた講義のリポートを提出しなければならなかった。体調不良の杉浦君は授業を欠席し、前日までに書いていた粗削りのリポートをオンラインで提出した。驚くべきことに、教養学部は、補講などの救済措置を取らないばかりか、この 2 回 5 月 10、17 日の講義の評価を 35 点満点で 0 点とした。通常、大学教員はどんな出来であれ、リポートを提出すれば 0 点にはしない。常軌を逸した評価で留年させるのは行き過ぎだ。

教養学部の対応が常軌を逸しているのは、これだけではない。生物学の単位不認定を知った杉浦君からの問い合わせを受けた後、生物学の点数をこっそり 17 点も下げている。このことが発覚したのは、杉浦君が、過去の成績通知画面をダウンロードし、保管していたからだ。7 月 18 日にこのことを指摘された教養学部は、同 27 日に杉浦君に送ったメールで、指摘を受けて教養学部として評価の精査を行っています。その結果として、成績が下がっていることについても適正な修正であることを確認していますと説明している。

ところが、提訴が差し迫った 8 月 16 日に杉浦君に送った回答では「成績の取り違えについて、最初に判明したのは 6 月 18 日の夕刻になります。学務システムへの入力は判明してから直ちに行われました」と主張を一変させた。そして成績を下げた理由として、他の学生と点数を入れ違えていたとした。杉浦君が、成績をダウンロードした 6 月 18 日 17 時 42 分とちょうど同じタイミングで、教養学部も気づき、適切に対応したことになる。にわかには信じがたいが、もし、そうなら可及的速やかに学生に通知すべきだ。ところが、8 月 4 日に文科省で記者会見するまで、教養学部は 1 カ月半にわたりこのことを隠した。さらに、8 月 16 日の回答で「今回の成績確認申請の結果、17 点が加算された学生については、特段の通知を行っていません」と説明したが、これも嘘だった。杉浦君には連絡していないが、もう一人の学生には 8 月 23 日に「次の科目で成績訂正がありましたので、UTAS（学内情報システム）にログインの上ご確認ください」と連絡している。

これが、杉浦君が提訴に至った背景だ。教養学部の対応は不誠実だ。学生が抗議したら減点し、追及されれば、場当たりな言い訳でごまかす。これまでも同様のことを繰り返してきたのではないか。東大が地盤沈下するのもやむを得ない。関係者の猛省を求めたい。